

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月1日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02326

研究課題名(和文)近代初期イングランドにおける祝祭と文学の関係をめぐる文化史的研究

研究課題名(英文) Research on the Correlation between Festive Culture and Literature in Early Modern England

研究代表者

竹村 はるみ (TAKEMURA, Harumi)

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：70299121

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、エリザベス朝イングランドにおいて祝祭が文学をめぐる新たな概念や様式を創出する上で重要な役割を果たした点に着目し、祝祭と文学を主要メディアとすることで発展を遂げたエリザベス朝特有の文化システムを検証した。特に、宗教改革後のイングランドで宗教的典礼に代わって流行した宮廷祝祭が宮廷文化と市民文化を繋ぐ文化的磁場として機能し、多種多様な文学ジャンルを創出する上で多大な影響を及ぼしたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、歴史学研究と文学研究を有機的に融合し、エリザベス朝イングランドのハイ・カルチャーとロウ・カルチャー、都市と地方、宮廷社会と市民社会、印刷文化と口承文化を地続きで捉える広やかな視点に認められる。そして、近代初期イングランドの祝祭文化と文学の互惠的関係を明らかにした考察は、政治に革新をもたらし、文化を刷新する力を発揮したエリザベス朝文学の特性を明らかにすることにより、文学と社会の関係のあり方をめぐる一つの有効なモデルを提示する点において、重要な社会的意義を有している。

研究成果の概要(英文)：The purpose of my research is to offer a reassessment of the cultural system of Elizabethan England by focusing on the vital role played by festive entertainments in constructing and developing new concepts and style of literature. Courtly entertainments, in particular, which flourished in place of religious rites in Reformation England, functioned as a vital point of contact for courtly and civic cultures and thus contributed much to the literary achievement of the period.

研究分野：人文学

キーワード：英文学 エリザベス朝 祝祭

## 1. 研究開始当初の背景

近代初期イングランドの祝祭はいずれもすぐれて文学的である。ギリシャ・ローマ神話や騎士道ロマンス等、古代・中世から伝承された文学的遺産がこぞとばかりに活用された。また、祝祭で披露されるパジェントや仮面劇は、同時代の演劇と同様に韻文による語りを基本とするため、その制作は詩人達が担った。つまり、祝祭という非日常の空間で繰り上げられる余興は、詩人達はその感性と想像力を駆使し、自らの世界観や理念を女王を含めた観衆に思う存分見せつける格好の公共メディアとして機能したのである。

しかしながら、祝祭と文学の関係、特に祝祭が文学の流通メディアとしていかに機能したかという問題は等閑視される傾向がある。たとえば、絶対王政が確立する中で興隆した宮廷祝祭が同時代の文学の発展に及ぼした影響については、未だ十分な検証がなされていない。

加えて、祝祭研究の分野で近年新たに関心を集めている分野として、近代初期イングランドにおける法学院の祝祭がある。グレイ法学院、ミドル・テンプル法学院、インナー・テンプル法学院、リンカーン法学院と、今もロンドンに残る4つの法学院では演劇活動が大いに奨励され、クリスマスや君主の巡幸に際して催された祝祭では、法学院生による自作自演の演劇が上演された。プロの劇団や役者が呼ばれることも多く、ウィリアム・シェイクスピアも例外ではない。従来は演劇だけが注目されることの多かった法学院であるが、その文芸活動は演劇のみにとどまらず、詩作もまた学内で活発に行われ、例えば1590年代に流行したエピリオンと称される小叙事詩など、法学院から発信された詩作品は多い。こうした創造的エネルギーに満ちた法学院文学は、法学院の活発な祝祭文化と密接に関連しており、両者を並列して精査することにより、ジャンルとメディアが多様化した近代初期英文学の特性を文化史的に解明することが可能となる。

研究代表者は、平成24年～26年度科学研究費基盤研究(C)「エリザベス朝イングランドにおける騎士道ロマンスの発展と変容に関する文化史的研究」による研究成果の一部である「エリザベス朝宮廷祝祭における妖精の女王のロマンス的変容」(2012年)や「友愛のスペクタクル『ゲスタ・グレイオールム』と1590年代の政治危機」(2013年)で、宮廷祝祭の主題やモチーフが改変を加えられつつ商業演劇や法学院祝祭に浸潤していく過程を跡付け、宮廷文化と市民文化の協働と競合という観点からエリザベス朝の祝祭文化の多様性を明らかにした。本研究では、以上の研究成果をふまえ、近代初期イングランドにおける祝祭文化と文学の発展的関係を文化史の視点から検証することを目指す。

## 2. 研究の目的

本研究は、宗教改革後のイングランドにおいて従来の宗教的祝祭に代わる多種多様な祝祭文化が興隆する過程を歴史的に再構築すると共に、それが同時代の文学作品に与えた影響を考察することによって、祝祭と文学が互恵的関係のもとに発展した近代初期特有の文化システムを明らかにすることを主要な目的とした。

その際に特に注目したのは、祝祭であれ、あるいは手稿の回覧であれ、本来ある特定の共同体の構成員の間で共有された文化的体験が出版市場を経て不特定多数の読者に開放されていく過程である。祝祭の様子がパンフレットとして出版されるのは16世紀末から始まる慣例であり、祝祭のテキスト化は、文学作品の受容や流通をめぐる問題と興味深い連動を見せている。近代初期イングランドにおける文学の大衆化・世俗化は、同時代の祝祭文化の拡散性や開放性と無縁ではなく、祝祭と文学の双方向的な影響関係を分析することによって、近代初期イングランドにおける文学の受容形態の重層的構造を明らかにすることが可能となる。

## 3. 研究の方法

エリザベス朝イングランドにおける宮廷文化と市民文化の混淆に着目し、王権・文学・祝祭を三つの基点として展開した近代初期イングランドの文化的特性に関する調査と分析を行った。その具体的な研究手法は、(1)歴史学研究と文学研究を有機的に融合すること、(2)エリザベス朝イングランドで花開いた豊かな祝祭文化を宮廷文化と市民文化の結節点として捉え直すこと、の2点に集約される。歴史と文学、ハイ・カルチャーとロウ・カルチャー、都市と地方、宮廷社会と市民社会、印刷文化と口承文化を地続きで捉える広やかな視点に立脚した手法を駆使することにより、エリザベス表象の多義性を解明すると共に、祝祭と文学の双方向的な影響関係を跡づけた。

## 4. 研究成果

本研究では、エリザベス朝を中心とする近代初期英文学作品と、同時代にロンドン及び地方で展開した祝祭文化を年代順に取り上げながら、祝祭文化が劇場や印刷出版と並ぶメディアとして、文学の創出・流通・受容に重要な役割を果たしたことを明らかにした。本研究の成果を以下の主要なテーマに分類して略述する。

### (1) 宮廷祝祭と騎士道ロマンスの影響関係の解明

エリザベス一世が君臨した16世紀後半は、ヨーロッパ大陸では既に凋落の一途を辿っていた騎士道文学が活気を取り戻す稀有な一時期を形成している。騎士道文学のリバイバルというこのイングランド特有の現象は、女性君主の誕生と密接に連動していた。

エリザベス朝の宮廷祝祭では騎士道文化のリバイバルが生じ、中世の騎士に扮した宮廷人達が参加する馬上槍試合が盛んに行われた。無論、騎士道趣味や中世主義はエリザベス朝の宮廷

に限った現象ではない。馬術や武芸は貴族のスポーツとして常に嗜まれたし、馬上槍試合はルネサンス期のヨーロッパの宮廷祝祭ではおなじみの行事だった。しかし、テューダー朝のイメージ形成において騎士道文化がその真価を発揮したのは、まぎれもなくエリザベス一世の宮廷においてであった。エリザベスには父王のように自ら武具を揮う選択肢はなかったものの、処女王に奉仕する騎士という構図は、女性君主のハンディを補って余りある演劇的效果をもたらした。それは、父祖の代には欠落していたロマンス色を新たに付与することによって、騎士道精神が潜在的に有しているサディスティックな暴力性を隠蔽し、より洗練された祝祭性の高いスペクタクルへの変容を促すことに成功したからである。

そして、こうした処女王崇拜に根ざした騎士道文化を取り込んだ宮廷祝祭をバックボーンとしてフィリップ・シドニーの『アーケイディア』やエドモンド・スペンサーの『妖精の女王』といった大作がエリート読者層に向けて出版される一方、大衆娯楽に徹した散文ロマンスや騎士道ロマンス劇がロンドン市民の間で流行する。そこには、貴族的エリート主義と世俗的娯楽性という騎士道ロマンス文学そのものに内在する二極性が窺えると同時に、宮廷社会と市民社会が物理的にも精神的にも緊密な形で共存していたロンドン特有の文化的土壌を見出すことができる。

### (2) 宮廷文化と市民文化の連続性に関する考察

本研究が特に注目したのは、宮廷社会と市民社会が祝祭と文学を通して緊密に繋がっていたエリザベス朝の文化システムの特異性である。たとえば、エリザベス一世の即位記念日を祝して毎年盛大に催された宮廷の馬上槍試合は、有料化された上で、ロンドンの一般市民にも開放され、他国からの訪問者の度肝を抜くほどの数の観衆を動員している。エリザベスと宮廷貴族が興じた騎士道ロマンス仕立ての宮廷祝祭は、さながらエリザベス朝のコスチュームプレイと言っても過言ではなく、従来は王侯貴族の娯楽図書であった騎士道ロマンスを広く民衆の間にも流行させる導火線の役目を果たした。それは、他のヨーロッパ諸国では中世文学の遺産に墮し、もはや衰退の途にあった騎士道文学にまたとない蘇生術を施すこととなり、ロマンスの大衆化という、現代にも通じる新たな活路を切り拓くこととなった。

宮廷社会と市民社会によって共有される祝祭文化は、同時代の演劇の発展にも寄与する。エリザベス朝イングランドの宮廷演劇は、経費削減のために宮廷余興のアウトソーシング化を目指す宮廷祝典局の方針もあり、商業劇場との連携によって成り立っていた。すなわち、宮廷演劇がリハーサル上演という名目で私設劇場の観客を楽しませる一方、ロンドンの人気劇団による宮廷上演が常態化する。女王や宮廷貴族とロンドンの民衆が同じ芝居を観劇する特殊な状況は、複数の視点を内在化させることによって、意味レベルの重層化をもたらし、作品の文学的表現力を一気に底上げした。

このように、宮廷祝祭が市民のための娯楽に供され、宮廷喜劇と銘打った作品がロンドンの劇場で盛んに上演されるのは、同時代のイタリアやフランスには見られない、イングランド特有の現象である。ただし、それは、イングランドの、というよりも、エリザベス朝イングランドの実に奇現象であることに留意する必要がある。ジェームズ朝やステュアート朝になると、仮面劇の隆盛によって宮廷祝祭は一層の豪華絢爛さを増しはするものの、それは王宮の閉ざされた空間の中に囲い込まれ、市民文化との乖離が決定的となる。文学的な祝祭を通して宮廷文化と市民文化の混濁が生じたエリザベス朝には、実に柔軟で融通無碍な文化受容の在り方が見て取れるのである。エリザベス朝文学がイギリスのルネサンス期と呼ばれる黄金時代を築くことになった所以は、まさにこの点にある。

### (3) 法学院祝祭の変容と 1590 年代の諷刺文学の関連性に関する考察

エリザベス朝を通して発展した法学院の祝祭文化は、同時代に興隆した宮廷祝祭の影響をまともに受ける一方で、都市文学、ことに 1590 年代に顕著に窺える諷刺文学の隆盛に大きく寄与した。法学院が英文学の発展、とりわけ、エリザベス朝末期からジェームズ朝にかけての文学作品の創出に果たした役割の重要性は従来より認識されてきたが、本研究では、それが法学院の祝祭文化と密接に関連していることを明らかにし、法学院の祝祭文化と文芸活動の相関性を明らかにした。

奨学金制度を持たない法学院は、大学よりも学費が高く、メンバーは裕福なジェントリー階級によって占められていた。しかし、16 世紀後半になると、新たに財を蓄えたロンドンや地方の商人の子弟も多数入学するなど、従来よりも幅広い階層のメンバーを抱えるようになっていた。同様の変化は、法学院の立地状況についても指摘することができる。法学院エリアは、ウェストミンスターとシティのちょうど中間に位置しており、もともとは学究に専念すべく歓楽街から離れた場所があてられていたが、16 世紀後半になると、ロンドンの肥大化に伴って環境は一変し、金貸し業者や私設劇場が密集するブラックフライアーズ地区と隣接するに至る。16 世紀末の法学院は、まさにロンドンの心臓部に位置していたことになり、そこに宮廷社会と市民社会が近接していたエリザベス朝ロンドンの都市空間の雛型を見ることができる。

宮廷文化と市民文化の結節点としての法学院の特異性は、その祝祭文化に反映されている。エリザベス朝の法学院祝祭は、騎士道的な宮廷祝祭の影響を強く受けており、その一例は、架空の君主を選出し、その君主のもとに架空の騎士団を創設する余興がパターン化したことに窺える。しかしながら、法学院祝祭の騎士道ロマンス趣味はしだいに変容し、エリザベス朝末期には宮廷祝祭に対して批判的な眼差しを内在化させていく。たとえば、1590 年代にミドルテンブル法学院で催されたクリスマス祝祭を宮廷風の騎士道ロマンス的祝祭文化のバーレスクとし

て捉えることも可能であり、騎士道的な女性崇拜や名誉崇拜が擲掬され、武芸よりも機知に重きを置く法学院の知的で遊戯的な校風の発露が窺える。リチャード・マーティンやジョン・ホスキンスら、後にジェームズ一世治下の議会で論客として活躍することとなる法学院生達が放つ余興は、宮廷祝祭、及びそこに通底する騎士道精神を擲掬する風潮において、従来の法学院祝祭とは明らかに異なる方向性を示している。そこには、エリザベス朝の宮廷祝祭でもてはやされた馬上槍試合や名誉崇拜に対するアンチテーゼが提示されると共に、来るべき議会国家の展望も予兆されている。

そして、法学院祝祭のこうした変化は、同時代に法学院出身の詩人や劇作家が牽引した諷刺文学の流行と連動している。1599年に公布された禁書令が象徴するように、1590年代は諷刺文学が一躍人気の文学ジャンルとして注目を浴びた時代だったが、ジョン・ダン、サー・ジョン・デイヴィス、ジョン・マーストンら法学院出身の作家達が果たした役割は無視できない重要性を有している。本研究が特に注目したのは、デイヴィスがエリザベス朝末期に発表した一連のエリザベス女王礼賛の文学作品である。これらは一見すると、君主崇拜の理念に貫かれているように見えるものの、むしろ反宮廷的とも言える市民的な倫理観や伶俐な諷刺精神を内包する点において、デイヴィス自身も深く関与した法学院祝祭と興味深い類縁性を見せている。

## 5. 主な発表論文等

### [ 雑誌論文 ] (計 2 件)

竹村はるみ、ブリットマートの「神の似姿」 『妖精の女王』第 4 巻第 6 篇における女性論、立命館英米文学、査読有、27 号、2018、36-57

Harumi Takemura, *Gesta Grayorum and Le Prince d'Amour: The Inns of Court Revels in the 1590s*, *Cahiers Élisabéthains*, 査読有、Vol. 94, Issue. 1, 2017, pp. 21-36

DOI: 10.1177/018476781772102

### [ 学会発表 ] (計 4 件)

竹村はるみ、"Be clamorous, and leap all civil bounds"! 『十二夜』とエリザベス朝中傷詩、関西シェイクスピア研究会 2 月例会、2019

竹村はるみ、鏡の中のエリザベス 『オーケストラ』と『シンシアの饗宴』、十七世紀英文学会関西支部第 208 回例会、2017

竹村はるみ、シンポジウム：シェイクスピアの遺産 没後 400 年を記念して、日本英文学会関西支部第 11 回大会、2016

竹村はるみ、シンポジウム：言葉の絵を見る エクフラシス再考、日本英文学会第 87 回大会、2015

### [ 図書 ] (計 2 件)

竹村はるみ、研究社、グロリアーナの祝祭 エリザベス一世の文学的表象、2018、414

Harumi Takemura 他、Osaka Kyoiku Toshō, *Spenser in History, History in Spenser: Spenser Society Japan Essays*, 2018、162

### [ 産業財産権 ]

出願状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況 (計 0 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年：

国内外の別：

### [ その他 ]

ホームページ等

特になし

6. 研究組織

(1) 研究分担者

なし

(2) 研究協力者

なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。